



東九州支部報

第111号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2025年10月25日(土)発行



ヒンズークシ中部コーイモンディ峰 登頂60周年記念の集いに

も く じ			
1. 支部活動		山岳連盟 黒原谷に参加して	11
コーイモンディ峰登頂 60 周年記念の集い	2	こぎこぎ倶楽部山行 梓峠道 3	12
7 月月例山行 文殊耶馬 (文珠山)	3	こぎこぎ倶楽部山行 ガラメキ峠～仏来山	14
8 月慰霊碑登山 安全を祈る集い	4	こぎこぎ倶楽部山行 時山～熊群山縦走	15
第 4 回 登山教室 座学コンパス研修	4	私の無名山ガイドブック・No98	16
登山教室とシニア共催 くじゅう山行	6	古典「山岳」拾い読み No9	17
アップスキリング 沢登り研修①	6	より安全な登山のために (No59)	18
アップスキリング 沢登り研修②	8	日本山岳会東九州支部會報 1 号 2 号 3 号	19
アップスキリング 沢登り研修③	9	事故報告書・ヒヤリハット報告書について	20
五支部集会 熊本支部	9	図書の紹介 坊がつる讀歌・誕生物語	21
2. 個人投稿		3. お知らせコーナー	22
ペンリレー (第 54 回)	10	後記	24

ヒンズークシ中部コー・イ・ モンディ峰登頂 60 周年の集い

江 藤 幸 夫（会員 8572）

2025 年 7 月 3 日(木) 午後 17 時 30 分～

何かにつけてまめに連絡を頂ける加藤さんから「四月の総会の時に話したと思うが」と、ヒンズークシ 60 周年集いへ出席しろとの手紙を頂いた。江藤のことだから mail では見落とすと思われたのかも知れない。私はといえば、無精者で返事も忘れる有様なので、更に開催日が迫ると確認の電話が掛かってきました。何度も手を煩わせ申し訳なく、又誠にありがたいことです。

ヒンズークシ登山隊員の内、隊長の矢野真さん・副隊長の西諒さん・マネージャー格だった梅木秀徳さんは既に鬼籍に入られ、残るは通訳担当の加藤英彦さん・食料担当の姫野和記さん・装備担当の私と半分になってしまいました。前回 40 周年記念の時にはまだ梅木さんが健在でしたが、今残っている 3 人にとって、もう記念の集いは今回が最後になるという思いは強くあります。



その後、安東支部長から式次第が送られて来ました。私は旧知に会えると楽しみにしていたので心待ちに指折り数えていましたが、出席名簿を見て出席者の多さにビックリ。古い話だし、こんなに多くの会員に興味をもって頂けるとは思っても見ないことでした。

当日、会えると楽しみにしていた姫野さんはとうとう見えなかったけれど、ヒマラヤ研究会で共に肩を組んだ矢野鉄雄さんを始め大分登行会の面々、当時より豊嶺会を率いた興田勝幸さん、大分 RCC で共に登った宮崎 正さん、勿論、長老の首藤宏史先生を始め多くの先輩諸氏等、懐かしい顔に再会して感慨も一入でした。

会は、準備して頂いた安東支部長を始め役員の方々のおかげで万端滞りなく進み、始めに加藤英彦前支部長の挨拶と当時の簡単な説明があり、私

も隊員で参加した一人として挨拶をさせていただきました。最後に梅木秀徳さんが撮影した遠征隊のフィルム（大分大学山岳部 OB の尾登さんに依る編集と電子化されたもの）を上映して盛会の内に終わりました。中でも「百聞は一見に如かず」の言葉通り、遠征のフィルム上映は皆さんの感興を刺激したようで、時折「オー」と歓声の上がることもあり、皆さん楽しまれたようでした。

記念集合写真の撮影に、チョットした会場側の規制がありましたが、それも無事終わり懇親会へと移りました。普通、この様な集まりは、本会よりも後に催される懇親会の方が出席者は少ないと思うのですが、今回は逆で、「懇親会」に残る人の方が「記念の集い」で帰る人の 3 倍近くで、大変な盛会となりました。

懇親会はワイワイガヤガヤと盛り上がりっぱなし、話は尽きないようで、お開きの時が来た時は本当になごり惜しいことでした。

私は常日頃「友人」と「仲間」という言葉を自分なりに使い分けています。細かな理屈はここでは省きます。JAC 東九州支部の仲間は「山が好きで、人が好きで、集いが好き」なんですね。登るだけが能ではないですね、時には何か勝手な名目を奉って集うのも楽しいとは思いませんか。



参加者・・・加藤、安東、山本、江藤、首藤、興田、大平、飯田(勝)、西(あ)、中野(稔)、下川、渡邊(保)、宮原、神田、佐藤(裕)、河野、深草、佐藤(彰)、笠井、中野(梨)、上野、河村、廣瀬、橋本、小竹、石川、生野、雪野、古谷(耕)、平原(瑞)、丸井(弘)、丸井(元)、矢野(貢)、佐藤(千)、土谷(美)
会員会友 35 名、他 11 名

7月月例山行

文殊耶馬(文珠山 615m)

井口 寛(会友 278)

2025年7月13日（日） 曇り小雨

今回の月例山行の日は4時00分起床。目覚ましのスマホを止めるや否や「ずっと」起きて階段をトントンと1階へ。今回は文殊仙寺駐車場に7時00分集合。計画では空港経由で70分。5時30分には自宅出発です。

ほぼ予定通りに出発。ところが、自宅では小さな雨粒が。別府ICでは雨、進めば進むほどしっかり雨。このままでは???と思いながら運転していると、なんと不安を吹き飛ばすように向かう先の空は徐々に青みが増してきました。今日の参加者の思いがしっかりと雨雲を押しつけてしまいました。久しぶりの文殊仙寺、立派な正門やトイレが設置され私のイメージが一新されました。次々に到着する参加者の顔、朝の挨拶が笑顔と共に飛び交います。

今日はラジオ体操で柔軟体操。思わぬところでお役に立てました。

7時13分文殊仙寺駐車場スタート、小岳到着は8時33分。樹林帯は通り抜ける風が心地よい。小岳で一服し紫竹観音目指して出発。ここから国東半島らしい急坂とタイトな道が連続します。「慎重に慎重に、注意・注意」と心の中で呟きながら進みます。眺望がきくところでは海に浮かぶ姫島が見えます。姫島から文珠山と両子山が並んで見えたなあ。エビもうまかったと余計なことを考えながら清滝観音を目指します。ここで水分補給と行動食でモグモグタイム。ここから文珠山に至るまでの30曲がりには難渋しました。足場はズルズル、先頭のリーダーが遠ざかる。汗が目にも染みる難所を登りあがりホッと一息つきました。文珠山到着11時24分、頂上の風、昼食、水分補給、友との語らいで心身共にリフレッシュ。しかし、久方ぶりに右太ももが攣って68番のお世話になりました。

文珠山出発12時09分。下山途中でハンカイソウという黄色の花を教えてもらいました。山で出会う花は色鮮やかであったり、小さく健気な形をしたものが多く心に残ります。徐々に傾斜は弱



まり余裕を取り戻しました。国東から四国の金毘羅様を遥拝する場所があるのは眼前に広がる周防灘や瀬戸内海があるからかなあと勝手に判断。

ゴロタ平13時07分着、ここで最後の休憩。今回のコースは見どころ満載、途中では前を歩くメンバーの足元しか見る余裕がなかったり、古の人々が崇めた石像や祠に出会ったり仁王様によく来たと言われたような気がしたり、自分の自主トレ不足を痛感したり多くのことを思い起こし学ばせてもらいました。

今回の山行は天気最高、景色最高、メンバー最高の最高尽くでした。参加された皆様大変お世話になり、ありがとうございました。



参加者・・・鹿島CL、興田、中野(稔)、今川(美)、神田、佐藤(裕)、平原(健)、笠井、中野(梨)、清田、河村、廣瀬、佐藤(美)、松浦、平原(瑞)、榎園、諸田、中島、井口、矢野(貢)、佐藤(千)、土谷(美) 計22名

8月慰霊碑登山

安全を祈る集い

諸田佳正（会友246）

2025年8月3日（日） 晴れ

「山の安全を祈る集い」 参加者 24 名 11 時 00 分 久住山御池遭難避難小屋近くの遭難慰霊碑に集合し、慰霊碑催事が執り行われました。（内 4 名は無理をせず途中撤退）

私は 8 時 00 分に牧ノ戸登山口を中野 CL 夫妻と共に出発し最短ルートで慰霊碑を目指します。強い日差しと暑さに負けず足を進めると、先に出発していた顧問加藤英彦さんのグループに扇ヶ鼻分岐手前 300m のところで追いつき、猛暑の影響だろうか腰を下ろし休憩されていました。無理をせずに行けるところまで進み引き返すそうで、体調の心配もさることながら中野 CL が到着しないとい催事が始められませんでしたので先を急ぎます。

10 時 50 分に慰霊碑到着。現地集合と云うこともあり、星生山、天狗ヶ城、中岳、稲星山を経由して集合したメンバーも複数人おり気持ちのいい汗を流され、また会話も弾んでいました。沢山のトンボが飛び交う中、準備も整い、中野 CL 司会のもと催事が執り行われました。安東支部長の挨拶、九重山法華院白水寺弘蔵岳久院主の読経、参加者の焼香にて亡くなられた方のご冥福を祈り、これからの安全登山を願いました。

支部長の挨拶では、昭和 5 年 8 月 11 日九重山で初となる遭難事故が起こり、九州大学医学部の若者二人が暴風雨の中、道に迷い、久住山の御池周辺で低体温症のため亡くなったそうで、後に遺族関係者により事故を風化させない為に慰霊碑が建てられ登山者の安全を見守られている事と、去年県内で起きた山岳遭難事故は過去最も多いと話されていました。

12 時 00 分集合写真を慰霊碑前で撮り、昼食後に現地解散、14 時 10 分、牧ノ戸登山口に無事到着。下山後のご褒美、ソフトクリームはいつもより一段と美味しく感じました。

帰宅後、遭難事故について調べたところ、県警察本部によると去年県内で起きた山岳遭難は暫定値で 51 件、過去最多の 2015 年と 2022 年に並んだそうです。遭難者の数は 56 人で亡くなっ

たのは 4 人、重症者 11 人、軽症 14 人でした。（支部長も挨拶で話されていました）

「九州の屋根」とも呼ばれ、県内外より登山者が訪れる人気がある山で悲しく痛ましい事故を起こさない為にも、過去の悲劇を教訓として安全・安心な登山を楽しめる様に、経験や体力に応じた山とルート選択、天候判断、適切なウェアと装備、そして何より無理のない登山計画を立てる事が重要だと感じました。初心に戻りザックの中（雨具、地図、コンパス、ヘッドランプ、非常食、救急セット）の再確認と、可能なら単独ではなく仲間と共に登山する等、山での危険に対するリスクを最小限にして、これからの山歩きを楽しんでいきたいと思ひます。



くじゅう慰霊碑前にて

参加者・・・中野(稔)CL、安東、興田、加藤、阿南、下川、今川(美)、河野、深草、平原(健)、中野(梨)、上野、佐藤(美)、石川、古谷(耕)、平原(瑞)、榎園、諸田、井村、中島、井口、矢野(貢)、土谷(美)、境 計 24 名

第4回 登山教室 座学

地図の見方やコンパスの使い方の基礎を学ぶ

古山真奈美(会友300)

2025年7月17日(木) 午後18時00分から
場所…ホルトホール 405号会議室

登山入門教室座学が開催されました。

まず、支部長のご挨拶がありました。今回の講座は正しい技術を学んでいただくのが目的のことで、登山中に雷が鳴った場合どうするか？

岩壁で洞窟があった場合と木の近くにいる場合とで、それぞれ避難方法の説明がありました。ま



ツエルトで実演中

た、ツエルトについての説明がされ、使い方をしっかり身につけること。購入したら嵐の日の大分川の河原で体験しようとのことでした。

講義は「地図の見方 基礎」「コンパスの使い方 基礎」について、講師の佐藤会員より色々な登山用地図の説明がされました。

何故、地図やコンパスの使い方を学ぶのか？

①山行計画の作成、②山の地形を知る、③現在の位置を知る、④ルート状況を知る、⑤山座同定、⑥二つ以上の目標物から現在の特定、⑦全体の山の地形から自分の位置を知る、⑧進行方向の変化を知ることができる、⑨地図の知識がなければ、GPS も使いこなせないなど地図・コンパスを学ぶ目的の説明がありました。

縮尺、地図記号、三角点、等高線などについても詳しく教えていただきました。私自身、三角点といえば画像撮影するくらいでした。三角点が設置されている場合、標高は小数点一桁の数字で示される。設置されていない場合、標高は整数値ということもわかりました。また、三角点豆知識2（三角点の仲間たち）の解説がおもしろかったです。

次に、等高線についての学習です。

等高線には「主曲線」「計曲線」がある。ピーク、尾根、谷、川、送電線などについての説明がされ、練習問題としてピーク、鞍部に印を付け、尾根線、谷線を引く練習をやりました。受講生の皆さんは熱心に練習問題に取り組んでおられ、地図読みが苦手な私は少し戸惑いましたが、会員の方から丁寧に指導していただけました。

山での「赤」テープについては、色々な種類があり、進行方向の確認に使えないものもあるとのこ

とで、これまでの登山でたしかに戸惑ってしまうケースがあったことを思い出しました。

ただスケルン、岩のマーキングは一般に信用できるとのことで納得です。

最後がコンパスの使い方です。整置の方法、進行方向の特定など説明がありましたが、実地で整置するのがわかりやすいとのことで、10月の登山教室実地研修で行うとのことでした。

コンパスの使用は難しそうに感じますが、今回の研修で学習したいと思います。

山登りの時には、つつい登山地図アプリに頼っていましたが、今回の座学で学んだことを参考に地図を活用したいと思っています。

講義終了後は山岳保険について、けがや遭難に備えて必ず加入をしようとの案内がありました。

低山や慣れ親しんだ山であっても疲れや油断から足元を取られたりしたことがあったので、保険への加入は必要かと思います。

さらに登山計画書の提出は必須だということも指導がありました。

ところで、講師の佐藤会員より雑誌「山と溪谷 2024年10月号」（登山アプリと読図の基本）の紹介があり、付録の「地図読みはじめての1歩」という付録がとても良いということでしたので早速購入いたしました。とても読みやすく活用させていただきます。ありがとうございました。



ホルトホールにて研修中

支部・・・安東、佐藤(裕)、佐藤(秀)、中野(稔)、平原(健)、笠井、中野(梨)、廣瀬、他7名
受講生 19名

登山教室とシニアの くじゅう山行

佐藤 裕之 (会員 16315)

2025年9月8日(日) 晴れ

場所…牧ノ戸峠～久住山等

…コース…

- ・のんびりコース 牧ノ戸峠～久住山～牧ノ戸峠
- ・元気コース 牧ノ戸峠～星生山～久住山～牧ノ戸峠
- ・健脚コース 牧ノ戸峠～天狗城～中岳～久住山～星生山～牧ノ戸峠

昨年から登山教室とシニアの合同開催で、久住を3コースの中からお好みに応じて歩いていただくことにしている。

集合時間を例年より、30分早めて7時30分開催としたが、第2駐車場の一部が工事関係のプレハブとなっており、駐車スペースが限られている。ちょっと心配したが、近くの駐車場や林道に停めて、何とか8時には出発することができた。



西千里から星生を昇上げる

折からの猛暑の日々で、久住も炎暑かと心配していたが、出発時は涼しささえ感じられ、快調な出足であった。ところが、受講生の男性が沓掛の手前でリタイア、どうもゴルフの疲れが残っているようで熱中症が治り切れていないようであった。奥様共々、笠井さんに同行して下山していただき、下山後は特に問題ないようであった。

その後は、概ね順調に推移して、久住山頂で全員集合写真を撮影して、ゆっくりと休憩する。このまま何事もないと思われたが、この頃から疲労を訴える方、足が攣った(攣りかけた)方など、ト

ラブルが続発しかけるが、班編成変更・芍薬甘草湯処置などで何とか乗り切り、無事終了かと思われたが、最後に健脚コース男性が、本格的に足が攣って30分以上、遅れることとなった。

下界が猛暑の連続であったため、涼しく感じられ、実際、昨年よりは涼しかったが、日ごろ登り慣れない方にはやはり、日中の暑さが応えたのかもしれない。

来年以降、日程を若干後にずらした方が良いとも考えられ、検討事項である。

とは言え、参加者のスキルと体力に合わせて、山を楽しんでもらうという目的は十分に達成したと思う。



久住山(1786.5m)山頂にて

参加者…受講生13人 会員・会友16人 計29人

アップスキリング沢登り研修

八面山 金色溪谷

佐藤 彰 (会員 16709)

2025年7月5日(土) 八面山 金色溪谷

コース…箭山権現石舞台～金色溪谷登山口～一の滝～和与石～箭山権現石舞台

8:30中津市八面山平和公園 集合。5台の車で箭山権現舞台の駐車場まで行く

天気は快晴。連日30℃超えの日々である。今年初めての沢登りであり、冷たい沢に入れるというワクワク感が高まる中、沢登り用の靴に履き替える。参加者8名の内、沢登り初参加1名、2回目の参加1名、当方もまだ初心者(今年で5年目)である。ほかの方ベテラン5名、年代も幅広く

30代1名、他は高齢者？今年還暦1名、来年古希になる人3名、もうすぐ？喜寿の人1名と平均年齢60過ぎの、若者とシニア世代の混合チームである。

安東リーダーのご挨拶で始まり、ロープワーク、ハーケンの打ち方を学ぼうと研修の目的を説明される。3班に分かれ、それぞれロープでつながりパーティーを組む。

9:00 駐車場から600mほど行ったところに、金色溪谷入り口という看板があり、舗装路の脇から入溪。いきなりの滝、水量が多い急登の滝である。この先の沢登りへの期待が高まる。水量も多いので、少し緊張しながら、ホールドを探し、慎重



に歩を進める。適度な凹凸があるため意外と滑らず、すっかり岩に沢靴がフィットし、登ることができた。最初一枚岩を登ると、今度は周りが見事な苔に覆われていて、滑り台のように滑らかに落ちて

いる滝が現れる。このような滝が、次から次に大小幾つも連続して現れ、緊張の連続である。

最後に頭上に迫力のあるカッコいい大きな岩塊が迫ってくる。落差があり、水量も多く分かれて流れ落ちてくる。これが一の滝とのこと。

それぞれロープで繋がっているのので、一人のミスが大きな事故に直結するという危うい側面がある。後部の当方が滑れば、前の笠井さん、佐藤裕之さん2名にも危険を及ぼすことになる。安東支部長からロープの持ち方を教わったが、パートナーとの距離感、ロープの束の長さの調整が難しく苦戦する。

この滝を登れば鳴子台と呼ばれている岩盤の上に出り、眼下に中津市市街地を一望できる。この居心地のいい場所で休憩をし、ハーケンの打ち方を学ぶ。

ハーケンには軟鉄と硬鉄があり、岩の溝に打ち込んで使うのであるが、軟らかい岩には軟鉄性を用いるそうで、岩の形状によって使い分ける事を教



わった。

このコースは祖母傾・大崩山系の水とは違って、水はあまり冷たくなく、上部に灌漑用の溜池があるため、泥くささがあり、水質はあまりよくない感じがした。しかし短時間にいろいろな滝が次々と現れ、飽きなく、楽しいコースだと思う。

【所感】

この研修山行が始まったのは当方の記憶では、支部長が会員のレベルアップを図るために、5年前から研修山行を企画したと記憶しているが、いつも参加メンバーが同じで、中々新たに加わる会員が少ない。どうして参加しないのか不思議でならない。勿論、いろいろな山歩きがあってもかまわないが、こんな楽しい沢歩きを抜きに山歩きをするのはもったいない気がする。

ベテランの安東支部長に指導して頂ける研修山行に参加しない手はない。当方も本格的に沢登りを始めたのは安東支部長に誘われ、中級者向け山行研修に参加したのがきっかけであった。今ではすっかり沢登りに魅せられ、「夏は沢歩き・沢登りに限る」と思う様になった。

沢登りの魅力は、自然が作り出す溪谷の美しさを登るたびに発見でき、青い空と木々の緑、次々と現れる美しい滝に出会えることができること。そして沢には登山道が設けられていないので、自身の感性と技術でルートファインディングができ、バランス感覚、体感を鍛えることができることである。何と言っても、自然と一体になり、童心に帰り、水と戯れ、仲間と一緒に登った達成感や充実感も味わうことができる。

わる。実際にここでハーケンを打ってみる。

メインの沢登りはここで終了。

12:30 最後に和与石岩の日陰で昼食を取り下山。3時間半の楽しい沢登りで

最初は誰もが初心者である。老若男女、技術、経験もない初心者でもそれなりに楽しむことができる。一度行ったら病みつきになること請け合います。こんな楽しい沢歩きを、皆さんも是非参加してほしいと強く思った。

今回の研修で、ロープワーク、ハーケンの使い方を教わったが、今回は奥岳川のサマン谷で、今以上にロープワークを習得し参加しようと思いつきながら帰路に着く。

参加者・・・安東 CL、佐藤(裕)、佐藤(彰)、笠井、上野、廣瀬、佐藤(美)、田浦 計8名

アップスキリング沢登り研修

奥岳川（サマン谷）

田浦良太（会友298）

2025年8月2日（土）

第2回目はサマン谷を登りました。

朝集合し安東さんから「師の言葉を大切に、わざや知識を次の世代に引き継ぐ」という話を聞きました。そして班分けでリーダー決めが始まり、必死に目を逸らしましたが安東さんと目が合いめでたくリーダー役になりました（笑）

第1回よりも水がきれい、水量もありました。入渓してきれいな水の中で涼みながら進むとスラブが見えてきました。僕がリードで登ることになり、スタートの取りつきが高く苦労しましたが、なんとか登り切りました。

ただ、登った後次に来る人のピレイやロープワークがまだ未熟でした。次に登ってきた安東さんにフォローしてもらいながら対応しました。

そこからしばらく進むと2個めのスラブがありました。2個目では、第一回沢研修で習ったハーケンを打ちました。

ここのスラブもリードで登りましたが、ハーケンやカムがあると無いとでは安心感が全然違うなと感じました。

ムンターは、下から緩めてと言われてすぐ緩められるので沢ではとても使い勝手がいいなと感じました。



また少し進むと、最後の滝にたどり着きました。興味があったので

で登れるかどうか滝のとりつきを少しだけかじってきました。下部はぬめってなかったけど、もっと上に行くとぬめってるか分からず戻ってこれなくなるので、不安になり引き返しました。ですが、師匠が登りました。

あの水量の中、カムの位置を考慮したりして、上に上に進む背中では流石だなと思いました。そして最後まで沢を登りお昼休憩して脱溪しました。

沢登りはまだまだ未熟で道具も足りて無いですが、実際に登ってみるとカムは確かに必要だと感じ、他の人が持っていて自分が持っていない同具は全部必要ということが分かりました。

また、リーダーとして自分でなく、メンバーが登れるかどうかを考えて動いたり、ピレイを取ったりする姿勢も大切だと感じました。

以上が第二回で僕が師から得た言葉や知識でした！



参加者・・・安東 CL、田所、佐藤(彰)、笠井、上野、廣瀬、川村(寅)、田浦 計8名

アップスキング沢登り研修

バリエーション

十万山大田川水系アライ谷、狗吠峠

林 須 美 子（会員 16773）

2025年9月13日（土）曇り・14日（日）雨
沢登りの研修山行として5名参加中2名が初参加。天候も出発前から危ぶまれていたため当初から3日間の計画を2日間のカリキュラムへ変更。宿泊場所の立野キャンプ場に到着し先ずテントを設営してから沢装備を装着し初日は計画通り「十方山 大田川水系アライ谷」へ。遡行時間約2時間（総時間3時間）、遡行距離約4km（総距離6



km）のショートコースではあったが最初から登るか巻くか悩ましい滝に2～3本遭遇し難儀するも後半はナメ滝や沢歩き程度であったので思いのほか早く脱溪出来た。

夕ご飯は橋本さんが食担して下さった

「もつ鍋」に舌鼓を打ちつつ、自己紹介やたわいのない話で酔いもまわり早々に就寝。

翌日は夜の内から降雨が続き当分止みそうに無かったので場所を広島県から山口県へ移動し狗吠峠にて沢登りをしました。前日の雨のせいか水量が多く流されそうになりながらの遡行。身の危険を感じながらも最終、夫婦滝手前で脱溪。そのまま犬鳴山山頂までハイキングしつつ下山しました。その時のシチュエーションで滝を直登するのか高巻きするのかの判断はまだまだつきませんが良い勉強になりました。



参加者・・・安東CL、上野、下坂、橋本、林

日本山岳会 九州五支部

懇談会に参加して

上 野 展 子（会員 17341）

2025年9月20日（土）から21日（日）

開催場所・・・阿蘇草原保全センター・阿蘇プラザホテル 主催・・・日本山岳会（福岡、北九州、東九州、宮崎、熊本）開催テーマ・・・古道調査発表 20日13時半～古道調査発表

それぞれの支部から今回のルートを選んだ経緯やルートの説明、見どころの紹介があった。我らが東九州支部は、安東支部長が発表した。いくつかの候補の中から六郷満山峰入りの道に決まったものの、[国東半島 祈りと修行の道]というルート



名になった経緯、約300kmに渡るルートを3つに分けそれぞれの担当者を中心に調査した事、調査には延べ1年半24回の時間と延べ350名の人をかけた事、その中から5ルートを選んだ事を説明した。そして、すでに日本山岳会のホームページにアップされ、今年4月には国東古道集中登山が行われた事を報告した。

20日18時～懇談会 懇親会 二次会

乾杯のあと五支部より一言ずつ活動報告、懇親会へと移り、交流、親睦を深める。シメはいつもの[坊がつる賛歌]合唱。

その後、二次会へ。

21日記念登山 馬の背ルート。

このルートは、牧野組合管理していて口蹄疫のため立ち入りが難しいルート。そこを歩くと聞き、とても楽しみにしていた。朝8時出発、牧草地に立ち入らないように進んだ。ポイントポイントで熊本支部によるルート整備が行われていて感動、感謝した。今回、実は、馬の背ルートにあると言う「硯石」と「鬼の岩屋」に行けるのではと期待して

いた。しかし、この場所は安全性の観点から立ち入りが禁止されている地域にあるようで環境省の許可が下りていないため、残念ながら辿り着く事ができなかった。12時45分下山。楽しい山行だった。（他に観光コースもあり。）

支部参加者・・・安東、首藤、加藤、阿南、飯田(勝)、中野(稔)、工藤、佐藤(裕)、深草、中野(梨)、上野、清水(道)、清水(久) 支部計13名



馬の背にて全員集合写真

個人投稿

ペンルー・第54回

「お世話になったお二人との山行」

尾 家 暁 夫（会員 16599）

起床しパソコンを開いたとき友人中でも山友からのメールを見つけると気分のよい朝がスタートする。支部の中野さんから連絡にもそんな気持ちでいたら支部報の原稿依頼と聞き「ギョッ」とした。文章書きは生来苦手なので受け難いとお断りしたが中野さんの強い勧めにお引き受けすることになってしまった。テーマは支部入会直後から親身に指導頂いたお二人との山行にします。

～加藤英彦前支部長との九重山山行～

今、私が好きな山は九重山と立山・剱岳だが、九重山を好きになったのは加藤英彦前支部長のお陰だ。九重山を加藤さんと幾度となく登山している中でこの山が有する多様で多彩な魅力を知らされ、実感した。加えて山行中に九重登山の歴史を語られ、遭難慰霊碑建立の経緯を知らされ、アセビ小屋では「坊がつる賛歌」の歌詞誕生秘話を話された。ある時は「九重の自然を守る会」への入会を勧められ、自然保護活動への知識・関心を深めることもできた。そんな加藤さんとの九重山山行には多くの思い出があるが、その中で特に忘れられないことがある。それは台風で倒れた遭難慰霊碑の再建作業を加藤さんが中心になって実施された日々のこと。再建作業を終えて、日が西に傾き出した中を下山している途中で先頭を歩く加藤さんが立ち止まり「今日は珍しく雲仙岳まで見えるなあ」と指さされると仲間たちもその方向に目を向けたが、この時の加藤さんと仲間たちの満足感に満ちた表情と、気持ちよい連帯感が漂う雰囲気とが忘れられない。

～佐藤秀二さんとの北アルプス山行～

大相撲力士の中に髪が短くて未だに大銀杏は結えないのに十両・幕内へとスピード昇進する若武者がいるが、既に髪が薄くなりこの先どう頑張っても大銀杏は結えない年代で登山入門教室を受講した私の望みは「低山登山ができるようになればよし！」だった。ところが、登山入門教室を終え会友になると、加藤前支部長と講師の佐藤秀二さんが「新会友の中で希望する者は来夏、槍ヶ岳と一緒に登ろう」と声掛けられ、ほぼ全員が参加を希望した。参加者が決定すると、お二人は翌月から槍ヶ岳登山を目指す訓練登山をスタートされ、九重連山・傾山・由布岳西峰・祖母山の黒金山尾根コース・

次のページへ

大崩山・国東半島ロングトレイルコースなどで実施された。その過程で①三点確保、②岩場歩き、③岩場の昇降、④鎖場・梯子の昇降、⑤キツイ登山道歩きなどを指導された。お陰で当初は3kg～5kgを担いで登るのが精一杯だったのが訓練後半には10kg～14kgを担げる体力になっていた。そして翌年夏に槍ヶ岳を目指したのだが、ヒュッテ西岳付近で強い風雨に遭遇し登頂を諦め（させられ）て水俣乗越から下山した。が、その次の年の夏、約束の山「槍ヶ岳」の山頂へ導いて頂いた。初めて槍ヶ岳山頂に立った時、老いて久しく忘れていた「たまらなく嬉しい時のハイタッチ」を思いっきり強くしたのを覚えている。佐藤秀二さんはこの後下記北アルプス縦走を毎年引率されその素晴らしさを新会友達にプレゼントされた。

① 上高地→前穂高岳→奥穂高岳→涸沢→上高地

② 室堂→立山→劔岳→劔沢→仙人池ヒュッテ

③ 唐松岳→五竜岳→鹿島槍ヶ岳→爺ヶ岳縦走

④ 新穂高温泉→双六岳→三俣蓮華岳→鷲羽岳→水晶岳→野口五郎岳→烏帽子岳縦走

低山登山ができるようになればよし！で入会した者が北アルプス縦走の辛さ素晴らしさ楽しさを知らされ立山・劔岳に魅了される男にまでなれたのは佐藤秀二さんに出会えたお陰だと感謝してやまない。

～ささいな自慢～

初めて槍ヶ岳登山に挑んだ時は合戦尾根の急登が辛くて、苦しみ、体力不足を自覚した。

そのことを佐藤さんに話すと私の力任せの歩き方を見ておられたのか「無理することなく自分が歩きやすいポイントが必ずあるので、その一点を探して歩くように」とOJTを交えて指導された。

以降、このことを常に意識し歩いている。数年後、唐津山岳会会長の娘さんで登山経験豊富な方と裏銀座コースを縦走した時、老いた私を心配し私の後方を歩いておられたが「あなたの歩いた跡に足を置くと楽ですね」の言葉を頂き「佐藤さん、実践できてますっ！」と心中で右手親指を立てた。

～夏の稜線を歩きたい～

病床にあった田部井淳子さんが亡くなる2週間前に「夏の稜線を歩きたい」と話されたそう。田部井さんはエベレストやグレートサミットの稜線をもう一度歩きたかったのだらうと思うが、多くの山仲間と山行しているうちに当初望んでいた山より高い山々を山行できるようになった私は気が合い信頼する山友と「夏の南アルプスで日本一高い稜線を歩きたい」と思えるまでになった。

※ペンリレー・今回は 河野達也 さん（16600）へお願いしました。お楽しみに。

大分県山岳連盟主催の 奥嶽川支流黒原谷遡行に 参加して 橋本柱（準会員 A488）

2025年8月24日（日）雲

大分県山岳連盟主催（以下、岳連）、祖母山系黒原谷、沢登り研修が開催された。当日は大分県山岳連盟、大分CCC、豊嶺会、緑山岳会、東九州支部が健男社広場駐車場に集った。講師は東九州支部、安東桂三支部長研修内容は滝登攀、読図他。

20人という大所帯の遡行は初めてだった。今期沢行の機会の少なかった私は何日も前からワクワクしてこの日を迎えた。

入渓ポイントは健男社から10分ほど車で尾平方面に走った小さな橋から。1グループを、4～5人にわけて順次遡行。岳連安部さんから「4段の滝で脱渓、全てのチームが揃ったらその時点で下山開始。」と説明があった。脱渓後の流れ下山は禁止だ。いろいろ注意事項を説明してくださる。安全を考慮して、細部まで様々な説明が入る。どんな危険が潜んでいるかわからない。勝手な行動は許されないのだ。みなさん説明に耳を傾け忠実な



行動を取っていた。入渓から快適な沢歩き。特にロープを使う場所もなく安全に歩くことができた。岩を飛び越えたり小さな滝を登攀したり。途中で砂防堤が現れる。支部長から「人工物があれば必ず現在地を確認。」私

は読図をしながら自らの位置を確認した。遡行だけでなく、登山において現在地確認は大切だ。私もみなさんと一緒に現在地を確認した。その後も楽しい遡行は続いた。8月の沢は水温も気持ち良く、時折木々の間から差し込む光に水面が照らされて、それはそれは…美しい光景だった。きっと、沢を歩いた全員同じことを感じていたと思う。8mの大岩の前で休憩、大岩は巻いた。最後に4段の滝を迎える。7月中旬に安東支部長と下見を兼ねて同じルートを遡行した。その時も4段の滝の迫力に圧倒され、その美しさに感動した。じっくり…見惚れていると、今からこの大きな滝を登ります。と颯爽と準備されている方がいた。岳連の原会長だ。初見にも関わらず、会長の身のこなしは軽やかで、しっかり足場を、探しながらルートを開拓されていた。無事に2段目までの登攀が終わった時は素晴らしいな…と思い拍手と共に何枚も写真を撮った。

私たちのチームは3段目の滝にフィックスロープをかけて、タイプブロックをつかいながら登攀した。タイプブロックの使い方に慣れず、戸惑った。自宅に帰って動画を観ながらタイプブロックの使い方を



おさらいをした。道具を使いこなすにはまだまだ練習が必要だ。3段の滝で全員集合したあと下山。事故なく下山できた。今回、他山岳会の方々と合同で沢登り研修という貴重な機会に恵まれた。はじめはお互い緊張の面持ちだった。同じ沢を歩き一緒に時間を過ごすことで最後にはお互いが仲良くなった気がした。沢が人を繋いでくれたんだ。山って素晴らしいな、そう感じた。

最後に、大分県山岳連盟、原会長、安部さんを初め、講師の安東支部長、準備に関わったみなさま。事故なく安全に下山することができました。楽しい時間をありがとうございました。

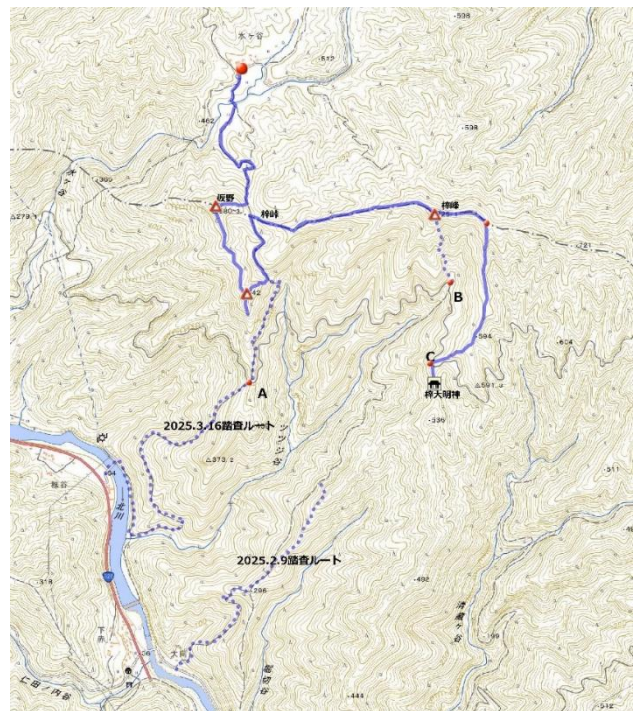
この場を借りてお礼を申し上げます。

参加者・・・安東CL、田所、上野、橋本、寺道

こぎこぎ倶楽部

昔の峠道を探索しよう「梓峠道3」

飯田 勝之（会員 10912）



2025年4月20日(日) 曇時々雨

梓峠道探索の三回目の挑戦です。今回は広域基幹林道登り赤線を使って、地図にある大向からの破線の道が、林道直下で消えているB地点から上を探って、うまく県境の梓峠まで登れたら、梓峠からの破線の道を林道のA地点へ下るといふ計画です。

4月20日（日）午前8時、林道B地点で小雨降る中、雨具をつけて谷に入りますが、狭い谷はすぐ奥が急な崖状で、この峻しい地形に古い峠道が通じていたとは到底思わないので引き返します。

この後、古い資料にある梓峰の国境と関係のある梓大明神の探索とします。B地点から600mほど行った林道のオープンカット地点に移動。そこは大向から梓峰の東に至る稜線を林道が横切る地点です。尾根に沿って作業道が下っています。その道を緩く下って行くと300mほどで左に小突起があり、そこ踏み込むとすぐ先に青い波トタンの屋根の小さな、ほとんど壊れかけた祠があり中に石の佛様がありました。これが梓大明神です。

9時20分、林道に戻ると、オープンカットのモルタル擁壁に階段があります。その階段を登って上の稜線に出ると、上の方へと踏み跡道が続いています。どうやらこの道が大向から上ってきている古い国境越の道に違いないと思われます。

20分ほどで登ると傾斜が緩くなり、9時50分過ぎ、地図上の594mの標高点を通過して道はずっと緩く続きます。そして林道から1時間40分ほどで東西に長い小ピークに到達です。ここが県境で、左にたどれば梓峰ですが、上って来た道は大分県側の植林地の中に消えているようです。県境稜線を西に行くとちょっと峻しい岩稜があるので、その手前の鞍部で昼食としました。時刻は11時15分です。

昼食休憩後、岩稜を登り越して、急斜面を登り詰めたところに4等三角点・点名：梓峠(725.08m)がありました。あとは植林地の県境稜線を緩く下って行くと、三角点から50分ほどで広い鞍部に着きました。ここが梓峠で県境に沿って張られたシカ避けネットの宮崎県側に乗り捨てられた軽トラックが半ば朽ちていました。そこから南に、地図では古い峠道が下赤のツツジ谷の吐合に向かって続いています。私はもう半世紀を超える以前に、椎谷からこの道を三度ほど歩いて登っていますが、その道の記憶はほとんどありません。22～23歳のころです。

地図上の破線に沿って下赤への道を探しながら谷に下って行くと、谷沿いに古い道があり、途中には二ヶ所炭焼き釜の跡もありました。しかしその道は谷の右岸をへつるようになって続き、かなり崩壊している急な崖のヘツリ道は、遂には前方が急な崖で行き止まりとなりました。

進むも危ない、戻るも危ない、進退窮まった状態です。地図を広げてミーティング。残る手段は地図上の524mの標高点を目指して登り、その稜線を下るという決断です。高度差約90m余の猛烈な急斜面をまるで四つん這いの登りです。ところが登りついた標高点から南に向かって行くと、その先は急に切れ落ちていて、地図上の等高線とは段違いの急傾斜です。3方とも猛烈な急斜面で、多人数で下るのは到底危険です。時刻はもう午後3時近い。再びミーティング、あとは稜線を登り返して水ヶ谷へと下るのが一番安全と判断です。急斜面の登り返しなどで消耗した体に鞭打って、何とか稜線を登り返し、4等三角点の仮野から下って林道に出てどうにか水ヶ谷に着いたのが午後5時前です。



余談

さてこれからが今日の報告の本番です。

水ヶ谷から上赤へと、地図上には破線がありますが、その道は、昭和初期の水ヶ谷の小学生が下赤の学校へ通うのに使っていたらしいが、今はもうすっかり廃道になっていて、殆ど不明だとのことで、夕闇迫り来る時刻に通れる道ではありません。残る窮余の一策で、水ヶ谷集落の最奥から二件目の民家の玄関を叩き、救済のお願いです。朝車を置いてきた所まで送って欲しいとお願いです。出てきた奥さんとその旦那さん。はじめは何のことも分からない顔をしていましたが、概ね依頼の趣旨を理解してきた奥さんが「それは困ったことだねえ。何処まで行けばいいの?」となんと、話に乗ってくれそうな反応です。詳しく話すと奥さんが「そんなら、私が送ってあげよう」と言ってくさる。そして、納屋の軒下に入れてある軽四輪車で運転手3名を送ってくれるという。本当に救われた気持ちになりました。

水ヶ谷から国道に下り上赤の国道から駐車地点まで全部で約33km、歩けば8時間?たぶん明日の

朝までかかるだろう、そんなことが出来るわけがないのだ。一晩中歩き続けるなんて到底みんなできそうにない。第一私がもうグロッキーだったのだ。さりとて泊まれる宿なんか、20km以上離れた三重町か延岡まで行かなければ在りはしないのだ。野営する装備も食料も燃料も持っていない……。

奥さんの快い返事に救われ、運転手三人が乗って車の回収に向かう道々、奥さんとの会話で聞けばなんと奥さんの年齢83歳でご主人は90歳のことだ。

午後5時50分、薄暗くなった駐車地点に到着。そうして、その帰り暗くなった林道の下りや、国道から水ヶ谷への林道の上り道を、奥さんは私達の運転する車にどんどんついてくるのだ。引き返す途中、水ヶ谷から歩いて出てきていたメンバーと合流。その場で奥さんに、みんなで何度も厚くお礼を言って別れたが、奥さんには本当に感謝に尽くせない気持ちだった。

しかも、謝礼をと言ってさしだすお金をも受け取ろうとしないのを、無理やりに何某かの謝礼を封筒に入れて手渡したのだが、そんなことでは尽くせない感謝の気持ちだった。おかげでさほど遅くない夜9時前には大分まで帰り着いた。今日の日本にはもう残っていないような、はるか昔の日本の原風景、温情豊かな人との心の温まる出会いの、春の日の夕方でした。

参加者・・・飯田(勝)CL、阿南、中野(稔)、中野(梨)、古谷(耕)、榎園、甲斐(英)

こぎこぎ倶楽部

ガラメキ峠～仏来ノ山(790m)

井村 ゆり子 (会友 259)

2025年7月26日(土) 晴のち曇

6月の「梓峠道」のヒル攻撃に流石のこぎこぎ倶楽部会員から「7月はヒルの出ない山域に！」の声が出て今回の山行となった。現在ガラメキ峠は山国町からは災害の関係で通れない。今回は日田市市木の砂防ダム近くに車を止め、ガラメキ峠→仏来ノ山を目指す予定で集合場所のことといの里を出発した。

市木の砂防ダムには車2台が駐車できるスペースがなく予定より300m程先に車を駐車しガラメキ峠を目指し歩き始める。しかし、直ぐに仏来ノ山方面に伸びる綺麗な作業道が出てきた。頂上まで続いているか不明ではあったがその作業道を進む事とした。しかし、快適な道は長くは続かず、青々と成長した草の中を飯田さんがウサギ道を探しながら藪漕ぎし進む事となった。藪漕ぎに疲れ樹林帯に入ろうとするも、仏来ノ山にもやはり鹿ネットが施されており、会員の行く手を阻んだ。ネット沿いに進むと切株の上の巢にウズラの卵があった。先頭の佐藤さんが「親鳥は近づくと飛び立った。親鳥が警戒して育児を放棄しないとよいのだが」と話した。その後杭が一本外れたネットを見つけ兎の様にぐり抜けた。やっと息ができた。頂上手前の等高線の間隔が狭い斜面の途中オレンジ色のヒオウギの花を見つけほっとした。9:56 頂上着。その後ガラメキ峠までは快適な尾根歩きで11:05着。50分弱休憩し、もう下るのみのふんわりした気持ちで下山を開始した。

しかし、沢沿いを下る道はかなり荒れており歩ける所を選んで歩くしかなかった。600m付近で5m程の崖が出てきた。①際を通る②高巻き③右岸のなだらかなルート探すが考えられた。まず③で進むも直ぐに背丈の茅に阻まれた。次に井村が①で進む。きわどかったが行けたので、2番手の大星さんが進むも、途中の土が剥がれ下まで滑って落ちた。幸い着地点が安定しており怪我無く済んだ。榎園さん佐藤さん清水さんはそれぞれの判断で高巻きをして合流。ところが飯田さんが降りてこない！少し探したが登山道に倒れている様子もない。実は③を選択し、少しの藪漕ぎを過ぎると快適な作業道だった様子で既に降りていた。流石ですが、誰かに伝えて欲しかったなー。兎に角13:53 全員無事下山。



私の目標は、日本百名山を登ることと里山を安全に歩くスキルを付けることですが、なかなか里山は手強いなと感じた山行でした。

最後に元会友の大星さんから「一瞬の躊躇が滑り台になりましたが、怪我無く皆さんに迷惑をかけずにすんでよかった。しかし私はやっぱりあんな山行が好きだなあ」とのメッセージを受け取りました。

参加者・・・飯田(勝)CL、佐藤(裕)、清水(道)、榎園、井村、他1名

こぎこぎ倶楽部

時山～熊群山縦走

諸田佳正(会友246)

2025年9月15日(月) 晴れ(午後からタ立)

午前8時、由布市役所前に参加者9名集合し、リーダー飯田さんよりルート説明がありました。午後3時より雨の予報となっていたため、熊群神社への鎖場と急峻な石段の下りは危険と判断し、熊群神社登り口への下山を断念。ルートは内山大池手前の林道分岐を出発点とし、時山(958.2)、直野山(913)へと稜線を進み、鞍部(725)へて熊群山(804.8)、鞍部(725)まで引き返し林道を直野方面へ下ることとなりました。

今回、初めてとなる熊群山は大分百山の一つで、「鬼が一夜にして築いた」という伝説の石段があり、非常に急で不揃いな石が積み重ねられ、あまりの急勾配で人が造ったとは思えないほど険しいそうです。ぜひとも石段を体験したいと思っていましたが、願いは叶わず残念です。※内心ほっとしている(笑)

直野へ下る林道に車2台をデポし出発点に移動、9:00 登山開始しました。地図を見ると、熊群山までは実線(1m以上5.5m未満の道)で描かれており道を間違えることも無いと思っていましたが、300m程進んだところで林道は鋭角に左に曲がっていて、素直に曲がろうとしていましたが清水(久)さんの指摘で直進だと気づく。地図を見なきゃ！地図を見れば一目瞭然だったのに…。反省です。

時山に続く尾根を登り切ったところで休憩を挟み、10:40 時山ピークに到着、三角点にタッチ。風もなく蒸し暑く汗が吹き出る中、みんな笑顔で記念撮影。小休憩の後、直野山へ足を進める。

時山から熊群山に掛けての縦走は登山者も少な



時山山頂にて

く大敷を覚悟していましたが、草木も生い茂っておらず、比較的歩き安く踏み跡もある感じでした。飯田さん曰く「踏み跡は猪だよ」と。確かに猪が餌を探した痕跡や又夕場らしき跡が多数ありました。11時ごろ小雨が降ってきたためカッパを着ましたが、すぐに雨が上がったので外の蒸し暑さと相まってカッパの中がひどく蒸れてサウナ状態のまま11:20 直野山ピークに到着。カッパを脱ぎ、本日2回目の記念撮影。昼食をとの声もあったが、眺望も無かったため600m程進んだ少し拓けたところで11:50 昼食となりました。(梨やオレンジの差し入れは冷たくて美味しかった)

頭上は晴れて日差しがあるものの、時折り遠くでゴロゴロと雷鳴が聞こえ、雲行きが心配でしたが、12:10 熊群山に向かい出発。途中、野生の梨(地梨)が実っており、棒で突いていくつか収穫、見た目は美味しそうでしたが、一口かじった方によると、地梨だけに”味なし”。だったのか？酸っぱくて甘くなかったとのこと。鞍部(725m)を経由し13:10 大分百山の熊群山三角点に到着。眺望も無く4等三角点と山の標識がぽつんとあるだけでしたが、本日3回目の記念撮影。

鞍部まで引き返し林道を直野方面へ下る。泥と砂利の林道がアスファルトに変わるころ、心配していた雨が降り出し急いでカッパを着る。14:40 天気予報通り雨となった。どしゃ降りの中、デポしていた車までたどり着き、16:00 由布市役所に全員怪我無く下山していることを確認し解散となりました。

距離 7.4km、のぼり 416m、くだり 627m 長く続く急登も無く、大雨も含めて終始楽しい山歩きでした。今回の山行で、ルート確認する場面が幾つか有りましたが、リーダーに任せずメンバー全員がルート確認等への協力が出来ていたと思います。意識的に周囲の地形を確認し違和感があれば声に出すなどコミュニケーションを行い、今後安全な登山を目指したいと思います。近いうちに熊群山の鬼の石段にチャレンジしてみたいと思います。



熊群山山頂にて

参加者・・・飯田(勝)CL、中野(稔)、今川(美)、清水(道)、清水(久)、榎園、諸田、関、境

私の無名山ガイドブック No.98

黒沢(420.5m)・山ノ戸(399.5m)

飯田 勝之(会員 10912)

宮崎県との県境稜線にある陸地峠（かちじとうげ）から北に分派する二つの稜線上のピークを紹介しよう。この峠は、我が国最後の内線となった西南戦争の戦場となったことは有名だ。この稜線のピークから北に二つに分かれて稜線が派生し、その間の谷が水源となって久留須川支流の細川内川が流れ下っている。この谷の上流で東西に門のように並ぶピークがこの二つの峰である。

黒沢

谷の東のピークが黒沢である。ほとんど山頂付近まで造林が施され、周りはスギ林であるが、山頂部だけミツバツツジ、ヒサカキ、ツバキ、ヤマモモなどが見られる。

国道10号の上ノ地から細川内川に沿って南下する市道を進み、黒沢地蔵尊の前を通り過ぎると最後の民家の先から道は「林道黒沢線」に変わる。この林道は500mほど奥の分岐まで車が入れるが、そこから先は荒れていて歩くしかない。荒れた林道を数分行くと、いっそう荒れて道が二手に分かれる。左の作業道を入るが、地形図の破線の道だが、谷添いに作られた道はわずかにその姿を残すだけ。急な谷に沿って直登するように道の跡をたどって登ると、15分余りで谷の最上部に達し荒れた作業道は左に巻いてさらに上へ150mほど続いて終わる。そこからスギの幼苗の斜面を直登し、稜線に至るのだがその際にはシカ避けネットがあるのでこれを潜って稜線に出る。あとは照葉樹の中をネットに沿って左にゆっくり登れば5分足らずで山頂だ。4等三角点は最高地点から北東に8mほどのやや低い窪んだ所にある。参考ルートとタイム…：駐車地点→5分→林道分岐→20分→作業道終点→10分→山頂
2万5千分の一地形図…上直見

山ノ戸

黒沢の三角点と、黒沢の谷を挟んで西にあるピークである。東側は荒れたスギ林、西側は灌木二次林でヒノキ、ヒサカキ、ミツバツツジ、ネジキ、ユズリハなどが見られる。

国道10号の上ノ地から細川内川に沿って南下する市道を進み、黒沢地蔵尊の前を通り過ぎると最後の民家の先から道は「林道黒沢線」に変わる。この林道は約500m奥の分岐まで車が入れるがそこから先は荒れているため歩こう。荒れた林道を数分行くといっそう荒れて道が二手に分かれる。右にUターン気味に分かれる林道を登っていくと、少し先で左に作業道を分けて、山腹を巻くように曲がりながら上へと続く。下の分岐から約20分で林道が大きく左カーブする地点から、右の植林地内の小谷状の斜面に真っ直ぐ作業道が登っているのでこれを伝う。作業道は100m足らずで消えるがそのまま真っ直ぐ上の稜線を目ざせばよい。途中、ウラジロが濃いところがあり難渋するが我慢して、分けて登ればほどなく稜線上で、右へ緩く下って登り返すのだが、ヒサカキやミツバツツジなどの小灌木のブッシュを分けながらの登りだ。稜線のヤブこぎ15分で小さな山頂でブッシュの中に三角点がある。

参考ルートとタイム…：駐車地点→5分→林道分岐→20分→作業道入口→25分→山頂
2万5千分の一地形図…上直見



JAC 古典「山岳」拾い読み No.9

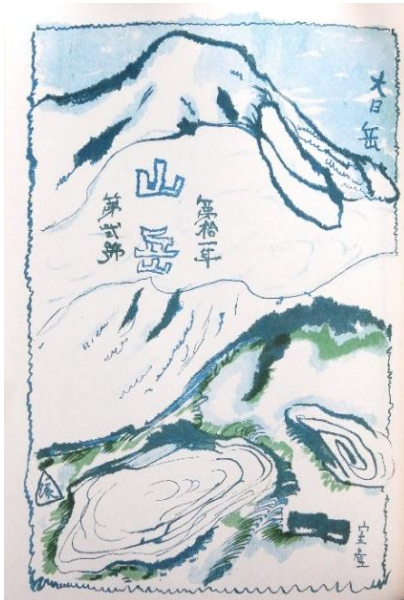
霧島の山々（明石国助）

飯田 勝之（会員 10912）

第十一年（大正五年）第二号 霧島の山々（明石国助）

「霧島火山登攀の記録は従来刊行せられたもので私が知って居るのは古くは橘南谿の西遊記、近くは田山花袋氏の「日本一周」と河東碧梧桐氏の「日本の山水」杯が詳しく、其外種々あっても簡単に過ぎて要領を得ないもの、又西遊記の焼き直しの机上登山記などが頗る多い様である。・・・高頭先生の「日本山嶽志」のは古今の記録を輯め頗る有益であるが現状と大分相違して居る・・・」で始まる紀行文である。

「花袋氏は日向宮崎方面から高千穂峯を越られ、碧梧桐氏は大隅方面から韓国岳より縦走して高千穂まで行かれたので、何れも三四年前のことだと



第11年第2号の表紙

思ふ。私は碧氏と同じく大隅より韓国、新燃、高千穂と別々に登って日向の方へ出たのである」と記して、あとは日記調に山行記を書いている。以下その日々の内容を簡略に紹介しよう。

七月卅日

「私が牧園驛（現霧島温泉駅）に着いたのが七時十分。寒驛なので赤帽が居ない代わり驛前の霧島温泉案内所から荷物を運んで呉れる。暫く休憩して五人乗の圓太郎馬車を雇って行く」とまず霧島温泉までの四里の馬車の旅から始まり、「急坂になると馬一匹では重荷過ぎるので尚一匹馬の先引きをさせるのは一寸奇観である」など、道々の様子や迫りくる霧島連山の景色の描写などがある。

七月卅一日

「榮之尾湯の山猿と稱ばれて居る案内者松方嘉左衛門は小柄な四十四五の男である。私の寫眞機と飲料と食料とをフゴに入れて背負った。宿を出たのが六時半。榮之尾の泉源である爆裂火口に沸騰する熱池を右に見て林に入る」でまずは大浪池への登り「灌木帯を脱したら、萱が私の背丈より高く・・・萱がなくなると今度は腰迄の熊笹だ・・・しばらく行くと大浪池岳の火口壁に達した」この後湖畔に下り、更に火口壁を南に半周した後韓国岳に登っている。「韓国岳は古来から高い割合に名高くなかった。それは、登るに不便なのと、山に奇がない為め單に襲(そ)の山として顧みなかった様だ。然し韓国の名稱は碧梧桐氏も云た様に躑躅の為め唐紅からきた名稱だとは登った人の直ぐ想像される事柄である」。

時刻は午前十時、筆者は案内者に高千穂まで縦走したいと申し出ている。碧梧桐氏が十一月に高千穂の麓迄歩いたのを知っているからであるが「案内者は身振ひをして言下に其不可能を説いた。十一月頃は草木も枯れて或は行けるかも知れぬが、今この頂に来る迄にすら萱や笹が如何に繁茂しているかゞ分る、と道々の嶮しさや蛇や蝮が多いことや天気も悪くなっていることなど説くので此企を放擲するより外に途はなかった・・・」山頂で小雨が降り出したので御池に向かって下ったが途中で「着物姿の男二人が素足に傘を杖にして・・・脚や手に血がにじんでる」と、湯治客が道に迷ってるのに出会う。案内者がいう「一圓そこそこの金を出し惜しみして、命を捨てる馬鹿がいるケン・・・」遭難者を連れて温泉へ、ずぶ濡れの帰還だ。

八月一日

この日は新燃岳までだ。「新潟から道は細くなった・・・韓国と大浪池と新燃都の裾が丁度合し逢ふた小高い處で道が二つに岐れた。左は韓国の麓をを廻って夷守岳の方へ、右は新燃の北麓を獅子戸岳へ・・・新燃岳は南及び西から望むだ如き頂上に大岩石の聳立した奇怪な山容は東の方からは見られない。至極緩やかな傾斜を以って獅子戸岳、矢岳に連なっている・・・私は柵の間から高千穂を見ることが出来た。昨日は紫に見えたあの山は今日は赫色だ。荒々しい溶岩流が鬼の口の様に山の一部を引裂いてタラタラと流れ出て緑の高原に強い岱赭の色彩の碩田を現出している・・・

（新燃岳）頂上は大浪池や韓国岳と同じで完全に近い圓形の噴火口で岸壁が痛快に瘤起しているのが面白い・・・」この日はそのあと温泉に下山している。

八月二日

「六時半高千穂峯に向かった・・・湯之野で休憩して出たのは八時・・・多年憧憬した高千穂峯が不可侵の態度で瞭然と御鉢から煙を上げて居るのを見ることができた。時に九時十五分、一木一草も生じない赤裸の整正な火山様式の御鉢の噴煙の間々に隠見出没する高千穂峯を背景に鬼の口の裂目から今食た許りの生血がタラタラと流れ落つ様な溶岩流が、深い噴裂罅から流れ出して、それが目の前まで續いて居るのだ・・・御鉢は見るからに愴然たるものがある。直径はそれ程大きくはないが何分屏風の様な岩馬の背越は文字通り恐ろしい處だが文字通り面白い處だ・・・」霧の中の山頂に着き「頂上に所謂天の逆矛盾なるものがあるが、各人の紀行に載せたのと形状は相違なく天狗の面を裏表に刻し其鼻が劔の鰐たり、長さ三尺位の青銅製の怪物、古來傳へられたロオマンティックな神話と似てもつない中古物、頂上まで登って茶にされた感気がする・・・」

このあと御池へと下り、その夜は高原に止まっている。（明石国助：明治～昭和の染色工芸研究家の12頁に亘る11,300字余りの長文の拾い読みである）

より安全な登山のために No.59 『ヘルメット』2025年10月号

安東桂三(会員 9193)

2025年7月10日、日本山岳会東九州支部の役員会が大分西部公民館で開催された。この役員会は概ね2ヶ月に1度開催されている。多くの議題を審議しているが、登山の安全対策について議論があった。「月例山行でヘルメット着用を」であった。遭難対策担当の笠井委員より提案があったが、結論は出なかった。また一部の委員から、登山用でなく、自転車用で代用出来ないかなどの意見があった。

そもそも、登山（クライミングでない）にヘルメット着用がなぜ推奨されたかということ、平成25年「山岳ヘルメット着用推奨山域」が長野県山岳遭難防止協議会によって指定されたのが始まりと思う。北アルプスの槍穂高、キレット、八峰キレット、南アルプスの甲斐駒ヶ岳などの岩稜帯が推奨された。これは、現在では、日本の多くの岩尾根や岩がちなルートで、多くの登山者が自主的に着用する動きになっている。

登山用のヘルメットは、どのような規格で製品がつくられているかということ、多くの製品は輸入品であり、それは「EN12492」あるいは「UIAA106」の基準を満たしている。EN12492はヨーロッパの安全基準で、UIAA106は国際山岳連盟の安全基準であり、UIAA基準のほうが、少し厳しい。

例えば、国内で販売されている自転車用ヘルメットは、JIS規格（JIS-T8134）を満たしているものが多い。また産業用ヘルメットも基準があり、厚労省の安全基準があり、もし登山用として使用するなら「飛来・落下物用」「墜落時保護用」のヘルメットとなる。

それぞれ、基準はどの程度のレベルかと調べると、自転車用と登山用を比べると、自転車用では、ママチャリ爆走で電柱に頭からぶつかっても生きている、登山用では女性用の11ポンドのボウリングの玉が2m上から頭にあたっても生きていると違いがある。

また、登山用と産業用で比べると、ほぼ同じレベルであるが、産業用ヘルメットは、顎紐の基準

がないので、落石や転倒によりヘルメットが脱げる可能性がある。

登山用ヘルメットへ代用を考えるのは、それぞれの特性を知っておくことが必要と思う。最近、ネットなどで、折り畳みヘルメットが紹介販売されているが、それらは、製造会社が独自の基準を設けているので、それを調べる必要があると思う。

さて、7月22日NBS長野放送は、7月19日～21日までの長野県内の山岳遭難が14件発生し、1人が死亡し7人が重軽傷をおったと報道した。私もこの3日間は穂高連峰に出かけていた。連休登山で山は人であふれていた。前穂高岳に登り、一般登山道を紀美子平へ下山中に「落(ラク)」の声を聴き、上を見上げるとちょうど太陽光線の方で、岩がどこからどのように飛んでくるか見えず、避けようがないと判断し、岩壁に体をくっつけ、力を入れ、構えた。すぐに頭に落石の直撃を受けた。40cm×10cm×7cmの立方体状の岩だった。幸いにヘルメットの左頭頂部に当たった岩は、そのまま私と壁の間に落ちた。身構えたのが良かったのか、特に被害はなく登山を継続できた。もしヘルメットをかぶらず、また身構えなかったら、NBS長野放送の山岳遭難を1件増やしたことになるかもしれないし、死亡していたかもしれない。

一般に林業作業や建築現場、土木現場では、「上下作業の禁止」が言われる。「上下作業」とは、建築や電気工事の現場で、同じ場所の真上と真下で同時に作業行うことを言う。上方の作業者は工具や資材を落下させ、下方の作業者に重大な危険を及ぼす可能性があり、過去にいくつかの事故が起こっている。防止策として、まずは上下で作業しないことや、ヘルメットの着用などがある。

登山でも、同様な策が考えられるが、多くの登山者であふれる一般道では、それも難しい。また、日頃は安全な平坦道しか歩いてなく、岩がゴロゴロしている道を歩く機会が少ない登山者は、人工落石を起こす可能性が高い。

落石受傷後に紀美子平に下りてきて、落石を起こした男性が、私に「すみません」と言いに来た。私は「あなたは加害者にならなくて良かったですね。私も被害者にならなくて良かったです。お互いに気をつけましょう」と伝えて別れた。

大分の自宅に帰って、一日経って朝起きられず、起きるときに自分の両手で頭を支えて起き上がった。

た。そのまま、針治療に出かけた。二日目は、首に違和感がありながら、この原稿を書き上げた。

(2025年7月23日 記)

日本山岳会東九州支部會報 第1号・2号・3号

安東桂三(会員9193)

本年は、当支部が創立してから、65年。またヒンズークシ中部コー・イ・モンディ峰登頂から60年が経つ記念すべき年である。当支部の加藤顧問から、コー・イ・モンディ峰登頂から60年が経つので記念式典を行いたいと相談を受けた。60周年記念式典をするのに、当時の資料集めから始めた。

このコー・イ・モンディ峰登頂は、私も知っていて、報告書は数冊持っていたが、それを読みたいという方々に配って、自分の分のみしかない。それを再度熟読し、他の文献も検索した。「九重山」とか「九州の岳人たちーその登山史」などを読み、この遠征がどのような位置づけかを理解し、同峰の成果は、当支部として、唯一の海外遠征登山だと理解した。現在まで多くのトレッキングは、行われていた。また、個人的な海外登山も行われていた。が、支部組織を上げてとは、なっていない。

その同峰登頂60周年の集いの準備中に、加藤顧問から連絡があった。「昔の支部報が出てきた。自分も知らなかった」と、顧問宅の倉庫から出てきた支部報（当時は會報）を預かった。カビが生え、紙面はボロボロと崩れ、悲惨な保存状況だった。と同時に、ヒンズークシ・ヌリスタン山群登山計画書、声明書、なども出てきた。

とりあえず、このままでは、ボロボロになり判読できなくなるので、大分市内の印刷屋さん依頼し、1枚ずつスキャンし、現状のデータで保存した。また、一部は回復しようと試みたが、予算と復活の難しさで、出来る作業のみで終わった。データは支部保管なので、必要な会員には、データで渡すことが出来る。

まず、当時の状況とは、1960年（昭和35年）8月5日、日本山岳会大分支部が、全国16番目の支部として設立され、支部長は永井清一氏、副

支部長は野口秋人、顧問は加藤数功、会員数は20名（會報によると）となっている。

そして5年後、1965年8月8日の支部総会で、大分支部を東九州支部の名称に変更している。

日本山岳会東九州支部會報の第1号は、1965年10月発行で、その内容を紹介すると。「支部のあり方と今後課題」野口秋人支部長には、宮崎県会員全員加入の結果、大分支部を東九州支部と改め支部の方針を再検討する必要があり慎重に考慮したいとあった。

また、日本山岳会は我が国を代表する登山団体であり、外国の一流山岳会に対して少しもひけをとらない。従ってその会員たる以上高度の登山意識とそれに関する知識を持つのは当然のことと考えられると記載されていた。

第1号のメイン記事は、矢野真会員が「ヒンズークシ遠征を終えて」であり、巻頭言に「今后、支部としての発展を期すべく山行にも親睦にも飛躍的な段階に達したと見る。その礎石ともわれわれがなり得るならば幸いであり、又そうならなくてはなるまいとの立場にたって、今度の遠征の経過および成果を発表したいと思う」とあった。当時の意識の高さがうかがわれた。

この1号には、会員簿（大分在住の20名）と支部規約も掲載されていて、その会員番号は1049番の工藤元平氏から、5908番の梅木秀徳氏までであり、この20名の内、現在では、18名が鬼籍に入り、2名が元気である。現在では、元気な2名は残念ながら、日本山岳会は退会している。

會報第2号（1966年2月）野口秋人支部長は、昨年のヒンズークシ遠征は大変な成功を収めたが、日本の登山界としていろいろの問題をはらんでいる。とし、アイガー北壁での渡部氏の遭難死、山川画伯の遭難死にふれ、登山団体の問題と共に今年の課題として考えたいと記述していた。

加藤数功顧問の「槇先輩を迎えて」では、八幡製鉄九重山荘に槇有恒氏を迎えて、本部の方針やエベレスト登山の件などの講演があったと書かれてあった。

他に、「日本山岳会東九州支部・大分登高会漢字山冬期合宿」を日本山岳会創立60周年記念支部事業として実施すると記してあった。

また、日本山岳会副会長の三田幸夫氏を迎えての記事、矢野真会員の「ヒンズークシ遠征を終え

て（2）」、工藤元平会員「久住志植物編」、宮崎在住の大谷優会員の山日記紹介、アンケート結果、役員會報告と第1号に未記載の9名の会員簿があった。

會報第3号（1966年5月）西諒会員の韓国合宿報告があった。本文によると3月26日頃、白鹿潭に登ったらしい。（本文中に詳しい報告書にする予定とあるので、報告書を誰か持っていたら、安東まで、連絡ください。）

總會報告、犬ヶ岳恐瀾谷山行計画などが書かれ、提案として矢野真会員の「『支部の在り方』の問題点」があった。それによると、単なる親睦団体であれば良いというのも一つの考え方であろうし、山行をぬきにした山岳団体は有り得ないとなす考え方も当然である。ここに何年来の解決を見ない問題点が内蔵されていると思う。總會は議事が承認されたが、所詮何等かの形で脱皮しなければならぬことわ全員認識を新たにしたことと思う。ところで脱皮の方向は結局支部としての山行を充実したものとする以外にはないのであるまいか。と問題提起していた。

會報第1号から3号は、ガリ版刷りであった。また、意見が本音だと感じられた。現在と60年前では、時代も異なり、政治や経済環境、など推察できないことも多いと思う。が、60年前の支部を構成するメンバーは、どん欲に山に向かい、支部活動に時間を割いていたことが伺われる。良い薬となった。支部としてデータで保存したので、希望の会員は是非申し出てください。

事故報告書・ヒヤリハット報告書について

事故報告書・ヒヤリハット報告書のフォーマットを作成しました。

今後の事故防止のため、提出のご協力をお願いします。

事故やヒヤリハットの原因を共有して、事故を防ぐ努力をしていきましょう。

■JIMSCA 登山月報(675/676号)山岳遭難事故報告書から。

◎女性の事故者数の増加が著しく、男性に対し1.7倍。

その中で著者山本氏はまだ坊がつるに一度も訪れたことがないとわかり今年法華院開山祭（4月5日）に坊がつるを案内した。その事が、坊がつる訪問記として、この増補版の冒頭に記述されている。坊がつる讃歌を要約すると、

- ①（昭和15年）元歌の「山男の歌」広島高等師範学校 山岳部の歌
- ②（昭和27年）あせび小屋で、当時九州大学生だった松本征夫、草野一人、梅木秀徳の3人が作詞した「坊がつる賛歌」
- ③（昭和53年）NHKみんなの歌で芹洋子さんの歌った「坊がつる讃歌」以上3つに分類される

この著者は②と③を分かりやすくするために、②を賛歌とし、③を讃歌としている

①の元歌 作詞者神尾正明、作曲者竹山信治についてはさすが地元広島でのいきとどいた取材で詳細なる記述がある。

我々が最初に歌っていたのは②の松本バージョンの坊がつる賛歌で9番まである歌である。

③の芹洋子さんが歌った“讃歌”は②の歌の1番3番4番8番と4つピックアップして4番までの歌とした。NHKみんなの歌で当時2ヶ月のロングランで放送され、その年の紅白歌合戦でも芹洋子さんが歌い全国に広まりレコード化され、以降「坊がつる讃歌」といえばこの歌だということになっている。

ところで、②を作詞した松本征夫さんは日本山岳会 福岡支部長であつたし、同じく作詞者の一人梅木秀徳さんは当東九州支部 支部長を歴任されている。いずれも九州を代表する岳人であつた。そしてこの本には私も「坊がつる讃歌と私」というテーマで書いており、今年6月に日本山岳会福岡支部長に任命された 柴田佳久さん（松本征夫さん二男）も同じテーマでの原稿がある。

法華院 弘蔵岳久さんも坊がつる讃歌の思いを語っており、首藤宏史さん、梅木三恵子さん（梅木秀徳夫人）や挟間渉さん（みどり山岳会）、安東公綱さん（大分合同新聞社）達のこの歌に関しての思いの紹介がある。

それほどまでに、日本山岳会とこの歌とのつながりが強く感じられる。

いろんな山岳会での宴席の締めにはこの歌がつきものだし、山小屋やテントの中でも酒が入ると、この歌が自然と歌いたくなる。

亡くなった山の仲間の葬儀の際、この歌を歌って送った事もある。

坊がつる讃歌とはそういう歌でもある。

坊がつる讃歌というより九重讃歌と言った方がよいのではないだろうか。九重に興味を持つ方にはぜひおすすめの一冊であり、昭和の時代に九重に関わった人達や、九重の歴史を勉強するにもよいだろう。

ネットにて販売されているし電子書籍としても閲覧する事が出来る。

お知らせコーナー

支部からの報告（会務報告）

支部会議開催報告

第1回役員会 9月5日（金）

大分市西部公民館

1. 支部行事山行の報告
2. 次回の山行について
3. ヒヤリハットについて
4. 他

第3回 支部役員会開催予定案内

日 時……令和7年11月7日（金）

場 所……大分市西部公民館 18：30～

支部ルーム開催状況

8月1日（金） 大分市西部公民館 出席者6名

9月5日（金） 大分市西部公民館 出席者13名

10月3日（金） 大分市西部公民館 出席者5名

支部ルーム開催予定

11月7日（金）大分市西部公民館 18：30

12月5日（金）大分市西部公民館 18：30

1月9日（金）大分市西部公民館 18：30

登山教室のお知らせ

▼第7回講座（実地研修）冬山登山

九重ヒュッテに泊まって冬の黒岩山・三俣山に登る

実施日……1月17日（土）黒岩山

1月18日（日）三俣山

集合場所……長者原ビジターセンター

集合時間……午前9時00分
 申込期限……12月25日(木)
 担 当……佐藤 裕之
 参加申込先……sa10h1952@ymail.ne.jp
 (人数に制約あり、受講生優先)

※地図 湯坪 1/25,000

住 所……杵築市太田保水 4448-1
 参加申し込み期限……12月5日（金）まで
 ※参加希望の方は（登山のみ・忘年会のみ・両方）
 参加されるコースを必ずご連絡ください。
 担 当……佐藤 彰
 参加申込先……akiraguitar1015@yahoo.co.jp

月例山行のご案内

シニアトレッキング 福万山

実 施 日：11月9日（日）
 所要時間……歩行時間 6 時間
 集合場所……由布院スポーツセンター駐車場（有料）
 集合時間……午前 8 時 00 分
 申込期限……10月25日（土）まで
 担 当……笠井 美世
 参加申込先……mmykasai@nifty.com

※地図 日出生台 1/25,000

1 月月例山行：大船山 岳麓寺コース

実 施 日……1月25日（日）
 所要時間……6 時間程度
 コース……登山口～柳ヶ水～入山公御霊廟を経て
 ～大船山～往路下山
 集合場所……岳麓寺登山口駐車場
 集合時間……午前 8 時 00 分
 参加申込期限……1月20日（日）まで
 担 当……佐藤 彰
 参加申込先……akiraguitar1015@yahoo.co.jp

※地図 湯坪・大船山・久住 1/25,000

11 月月例山行：英彦山～岳滅鬼山

実 施 日……11月16日（日）
 所要時間： 約 10 時間
 集合場所： 英彦山登山口北駐車場
 集合時間： 午前 5 時 30 分
 参加申込期限……11月9日（日）まで
 担 当……中野 稔
 参加申込先……zermatt1111nm@gmail.com

※地図 英彦山 1/25,000

2 月月例山行：福知山

実 施 日……2月8日（日）
 所要時間： 7～8 時間程度
 集合場所： 未定
 集合時間： 午前 7 時 30 分
 参加申込期限……1月31日（土）まで
 担 当……佐藤 裕之
 参加申込先……sa10h1952@ymail.ne.jp

※地図 徳力・金田 1/25,000

12 月：忘年登山と忘年会

忘年登山……妙見岩屋～天疫神岩屋
 日 時……12月13日（土）
 集合場所……旧千燈寺駐車場 午前 9 時 00 分
 コース……旧千燈寺駐車場～妙見岩屋～天疫神岩屋～旧千燈寺駐車場（時間があれば、薬師岩屋、普賢岩屋に行きます）
 登山終了後、忘年会上場へ移動

忘年会……横岳自然公園横岳荘

日 時……12月13日（土）
 開始時間：18：00 忘年会（宴会スタート）
 ＊詳細につきましては後日ご連絡します。
 宿泊所電話……0978-52-3146

支部からのお知らせ

喜寿お祝い登山

高崎山で喜寿のお祝いをしよう！
 実 施 日……11月2日（日）
 集合場所……銭瓶峠 駐車場
 集合時間……午前 8 時 30 分
 申込期限……10月27日（月）まで
 担 当……中野 稔
 参加申込先……zermatt1111nm@gmail.com
 ※地図 大分・別府東部 1/25,000

第37回宮崎ウェストン祭・宮崎支部主催

日 時……11月3日（月）4日（火）

場 所……宮崎県高千穂町五ヶ所高原（三秀台）
※申込は10月16日で締切ました。詳しい詳細
がお知りになりたい方は事務局まで連絡（電話ま
たはメール）下さい。

担当 阿南寿範 beca5844@oct-net.ne.jp

令和7年 年次晩餐会のご案内

日時……令和7年12月6日（土）

場所……京王プラザホテル

集合時間……受付開始12時30分～

出席希望の方は会報「山」10月号にて案内と詳細を
お知らせしています。HP もご覧ください。

2025 年度研修山行 リーダー育成研修事業 アップスキリング登山

- ・アップスキリング雪山（雪山を初級から学ぶ）
- ① 11月8日（土）高崎山大谷 その1
- ② 11月30日（日）高崎山大谷 その2
- ③ 2026年1月10日（土）～12日（月）バリ
ュエーション（目的山は後日）
- ・少しでも登山技術を伸ばせば、山の世界が広が
ります。登山道具の相談にも応じますので、参加
希望の方は、お早めをお願いします。

参加申し込み…安東 桂三 090-5727-9472
keizoando@xa3.so-net.ne.jp まで

新人会員の紹介

・会 員 佐藤 美和子 会員番号 17532

東九州支部のホーム
ページに、皆さまの山行
報告を掲載しております。
今後も皆さまの
ご活躍を随時更新して
まいりますので、ぜひご覧ください。



後 記

- ・秋の夕焼け鎌を研げ。夏の夕焼け川を渡るな。
- ・朝の虹は雨。夕方の虹は晴
- ・飛行機雲がすぐに消えると好天が続き、何時までも
残っていると天気は下り坂。
- ・幾つもある昔からの観天望気のことわざや言い伝
え。それが山歩きには欠かせない天気予報となる

のだ。携帯で天気予報や雲のレーザーなどが見ら
れるようになった今日でも、時々刻々と変わりゆ
く空模様を判断するには、風や雲や霧などの方が
いち早くそれを知らせてくれる。

- ・奥ヶ迫の林道から万治越に向かって登っている時
だった。急に周りに一匹のスズメバチが頭の上を
舞い始めた？と思ったが、どうやら近くに巣があ
るらしいと思い、少し歩を早めて登るが、しつっこ
く離れずに威嚇飛行だ。ちょうどいい具合に、前方
の道の両側が猛烈なスズメバチのブッシュだった。
急ぎその中に潜り込んで、奥へ入って行ったら羽
音がしなくなった。しばらくスズメバチのブッシュ
の中を這い進んで道に出た時にはもう羽音はしな
かった。
- ・20年ほど前のことで、今はもうその辺にはスズメ
バチはない。秋の深まりとともにスズメバチの活動
が盛んになる。連日熊の出没に関する騒動が絶え
ないが、実はクマよりもスズメバチの方が怖い
のだ。今年のクマによる死者数6名、スズメバチによ
る死者数は毎年20～30名。スズメバチに気を付
けよう。
(K・I)

- ・支部には『新大分百山』（登山ガイドブック）の
在庫があります。まずは大分の百
山から歩きはじめてみませんか？
購入をご希望の方は中野までご連
絡ください。
価格は2,420円です。



次回の原稿締切は12月末となっております。

どうぞよろしくお願いいたします。(M・N)

zermatt1111nm@gmail.com まで

公益社団法人日本山岳会東九州支部 東九州支部報 第109号

2025年（令和7年）10月25日発行

発行者 安東桂三

編集者 中野稔 飯田勝之

発行所 事務局

〒879-1113 大分市中判田 15-55 阿南方

TEL・FAX 097-797-7120

E-mail beca5844@oct-net.ne.jp